

尼法師（第二）：文苑

著者	晚霞仙
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 6
ページ	3 5 - 3 8
発行年	1893-04-30
URL	http://hdl.handle.net/2298/4067

謁宮本武藏墓

同

隈本繁吉

兩刀妙術古今稀、仇恨報來意欲飛、
毅魄茫茫呼不返、老松鬱處舊碑微、

湯之谷客舍夜來雨風甚

同

同

蘇岳雨風入夜頻、旅窓燭暗苦吟身、
卽今欲問熊城友、屈指埃余知幾人、

謁公木澁江翁

同

同

鞍岳之西菊川東、闔門忠節向南風、
餘香猶在遜志塾、高德如山耳順翁、

尼法師

第二

晚霞仙

主の尼は端近き

月の光に朦朧と

磯打波は春の花

過きにしことの忍ばれて

妾は本は先帝に

呼ばれしものを源と

落つる涙に大内の

野末にすたく虫の音も

飛こふ鷺も白旗と

障子をやら押し開けぬ

遠近方を眺むまば

其麗き景色をば

獨り下せし袖の雨

御宮仕へ申せしが

云ふも今早怨なれ

山もおぼろの夕霧に

尾花が末の風の音も

只に心をいためつゝ

吹雪も今は早止みて

雪かたわめる磯馴松

眺めやりつゝいとい猶

はらひもあへず云へる機

名をば源典侍とて

過ぎし壽永の秋の月

花の都を後になし

或は遙々き波の上に

つらき月日を送りしが

一の谷の戦に

汀によする片小舟

音のみぞいとし凄じ

檀の浦邊に漂ひぬ

夜は又遠く沖になく

御運の末こそ是非もなや

風にせかれて立波の

今はさやかに覺えねど

風も靜に月さえて

二千里の外遠からぬ

月の光も冴え渡し

磯にくだくる波の音

何處の舟にあるやらん

いとも絶なる其戀

遠き浦曲の里のみか

思はず知らず聞くからに

側へにありし行盛卿

味方の武運拙くて

波のまよ／＼ゆられ／＼

又や八島も守り難

晝は幽けき青海原

千鳥と共になき明し

力も頼む武夫も

打つかと思ふ白旗は

折しも時は長月の／＼

寄する細波てりまさり

都の空も見ゆるめり

當りはいと物寂し

眠るどもなく行末を

遙に聞ゆる横笛は

霧立ちこめし波の面に

み空に高き月よさへ

いとし昔の戀しくて

何思ひたん舟べりに

破れし後は波枕

水の音高く矢叫の

筑紫もよるべなきさこぐ

波路に袖をぬらしつゝ

今日や明日やと思ふ中

多くは敵に降りなし

雲か霞の如くなり

三五夜中の事なりし

立つ夕霧に眺むれば

其夜もいたく更けぬらん

只折々に聞ゆるは

思ひめぐらす其内に

誰が吹きささむ音ならん

いとしやさしく澄み渡り

其音ゆるしく聞ゆらん

落つる涙は袖にみつ

立上りつゝ口ずさむ

君棲めばこゝも雲井の月なれど猶戀しきは都なりけり

✱
✱
✱
✱
✱
✱
✱
✱
✱

枯るゝも同じ野邊の草

榮ええことも夢の間や

月隱をゆく村雲屯

今は八嶋や壇比浦

よる方もなくわびわつる

明日をも知らず東の間を

散り行く花と諸共に

實に哀れにも悲乏かりける

涙をとらひ云へる様

若しも此世に罪業を

身のなる果ぞ恐ろしく

帝を初め諸人の

惜からぬ身をながらへて

此浦の邊に柴引きて

此浦の邊に柴弓まで

人相告ぐる鐘の音に

壽永の昔其初め

壽永の昔其初め

よそよ見なして嘸さつ

鹽屋荒き荒波に

身の悲しさやいかならん

榮村の夢と浮城とは

妾も同シ夕波の

亡ぼし得ずばいつまでも

世をばのかれて朝夕に

後ねんどろに吊はい

つらき此世に出でにしが

庵を結び朝夕に

手折りて佛に手向けつゝ

早や一年を送りけり

紅葉織りなす秋の山

帝の事のみ思ひ出で

さらば御身はいかにして

浮世の外れ尼の身と

聞まほしさと云ひつれば

其身の事の本末を

歸る夕の雁金を

涙に袖のかわくまもあし

行先き長き誓りを

なまたまひしか事からを

こなたの尼は今迄も

主の尼に語りけり

山本固一郎君の變死をいたみて

ろの一

昨日まで

何地^{いづち}行けん今朝よりは

うしこの室に君寢ぬと

行けば何事ぞ人々は

あとげなく

日はとや高くのぼりぬと

口動かさずさかぬなり

「如何に死せしか此君は」

かしこの木影こゝの園

隈なくさがし求むをど

悲しく人のいふまゝに

君の周り又打集ひ

眠れる顔に顔よせて

呼へどさけべどつむりたる

唯一言のいらへだに」

問へど傍^{かたへ}の人々は

聞きてはいと古への

斷ち切りつゝも世をすてゝ

くるまからずば告玉へ

おゝひし袖を放ちやり

(未完)

多 涙 生

遊び^{たは}戯れしりの君は

片影だにも見へぬと」

いざ立よりて覺^ささんと

涙にくれて物悲し」

「いざさめたまへ起玉へ

眼開かず結びたる

さてはこの君死にけるか

涙にくれて物言はず